

## 『紫式部集』の地名

廣 田 收

(一) はじめに

『紫式部集』は『源氏物語』の「作者」が書いた「作品」として研究され、『紫式部日記』とともに、『源氏物語』研究や紫式部その人の伝記研究の資料としても重視されてきた。『紫式部集』の研究は、概ね、紫式部その人に関心があるか、もしくは『源氏物語』の研究のために奉仕するものとなる傾斜を持っていたということができる<sup>①</sup>。『紫式部集』は、紫式部その人の伝記研究の未開拓の資料として評価され、『紫式部集』における考証研究の進展によって、知られざる「紫式部」が明らかにされてきたということもまちがいない。多くの先学の詳細にわたる研究業績に敬意を表したい。また、伝本研究については、本学名誉教授南波浩先生の『紫式部集の研究 校異篇・伝本研究篇』（笠間書院、一九七二年）があり、評釈研究

においても『紫式部集全評釈』（笠間書院、一九八三年）という総合的な研究の達成によって、われわれは学恩に浴することができ

る。それにしても、『源氏物語』研究の伝統に比べるとき、私家集としての『紫式部集』の本格的な研究は歴史的にはなお新しいといわなければならない。ここに、『紫式部集』における地名を歌の解釈の鍵語として取り上げることで、従来の『紫式部集』の読み方とは異なった問題の立て方を試みようとするものである。『紫式部集』における地名の多くは行旅に集中的に見られる。そのことから、従来の『紫式部集』における地名の扱い方に、紫式部の越前下向の行路推定<sup>②</sup>という地理考証、また作歌時期とそのときの紫式部の心理状態の推測などに論議の関心が集中する傾向があったことは否めない。たしかに伝記を明らかにすることで、歌に関する疑問の解明されること<sup>③</sup>があることはいうまでもない。しかるに、歌や詞書の内実、ひい

ては歌の配列から全体の編集の意図にかかわる問題までもが、歴史上の事実なるものに押し戻される危惧がないとはいえない。ここに、私家集ははたして文学たりうるのかという根底的な問いが必要である。私家集を文学それ自体としてどのような視点から捉えればよいか。この問いに答えるために、地名が私家集の読み方に重要な手掛かりを与えるのではないかということが出来る。歌における地名とは何か、その問いに答えることがすなわち、「紫式部集」という私家集を文学として読む読み方の一つに他ならないのではないかと考えるものである。

ここでは、すでに写真版によって公刊されている、南波浩先生編「紫式部集 陽明文庫蔵」(笠間書院、一九七二年。本論で、詞書の肩に付けた番号は歌番号を示す。これは、ここに掲げたかぎりでは、南波浩先生編「紫式部集」岩波文庫の校本の番号と一致している)を底本として用い、岩波文庫「紫式部集」付載の陽明文庫本の翻刻を参照し、同じく南波浩先生の「紫式部集の研究 校異篇・伝本研究篇」に掲載されている異同を対照しつつ、いささかの考察を加えたい。

(二) 言葉の遊戯性への関心―「知りぬらん」の歌

23 しほつ山といふ道のいとしけきをしつののをあやしきさまともして

なをからき道なりやと云をき、て

しりぬらんゆき、にならすしほつ山世にふる道はからき物そと

この歌は、一般に紫式部の越前下向のときの歌として考えられている<sup>④</sup>。例えば、はやく岡一男氏は、群書類従本に従って「紫式部集」の配列が「ほぼ年代順である」(『源氏物語の基礎的研究』一七七頁、東京堂、一九五四年、増訂版一九六六年。以下略記する)という見解を述べておられる。「(20) から (24) までの五首は琵琶湖畔の詠であるが、(25) から (28) までの四首が越前国府においての作であるから、それは越前への旅の歌であることがわかる」(同、一七五頁)と、この歌を下向の旅に位置付けられる。また、竹内美千代氏は、「旅の歌は往きには都恋しき、心細さの旅情を卒直に詠んで居り、帰りは帰京の喜びにはずんだ心を即興的に、機智に富んだ歌を口ずさんでいる」(『紫式部集評釈』七〇頁、桜楓社、一九六九年。以下略記する)とされ、塩津を帰路に位置付けておられる。清水好子氏は越前下向途中の歌として位置付けられている(『紫式部』四七頁、岩波書店、一九七三年。以下略記する)。南波先生は「夏の繁路であり、往路の歌であることが明らかである」(『紫式部集全評釈』一三八頁、往路・帰路全体の旅程については、一三二頁を参照)とされている。詠歌時期が往路か帰路かという判断から、紫式部のそのときの心境を詮索することもできよう。ただ、こうし

た考察方法は、歌の時期の確定が歌の内容から推定され、さらに推定された時期がどのように歌の解釈にかかわってくるかという循環的な働きを帯びてくることにもなる。

私家集の歌を検討する際、まず想定されるべきは、歌が個別に歌われた生成の場と、後の時期において編集される場との関係である。歌われた場における歌の意味や価値は、現存伝本から透かし見ることで推測されるべき問題である。残されてある『紫式部集』はある意図のもとに編集されることにおいて完結性を有している。だから、詞書に即して歌を読むことが求められているわけである。いずれにしても、現在の詞書と歌の配列において、詞書と歌は詠歌時点の自己の心境を記憶し記録しようとするためにあるわけではない、と想像される。問題はそこにある。

まず、歌23の詞書に「猶からき道なりや」という言葉は、「やっぱりこはつらい道だわい」（竹内氏、七〇頁）とか、「相変らずえらい道だなあ」（清水氏、四七頁）、「何度通っても、やはり、歩きづらい道だわい。」（南波浩先生『紫式部集』岩波文庫、二二頁、脚注）、「平素何度も歩いている道なのに、何度歩いてもやっぱり歩きづらい道だなあ」（南波浩先生『紫式部集全評釈』一三九頁）と現代語訳されている。「やはり」や「相変らず」に含まれているのは、いつも通っている道であるが、のニュアンスであろうか。また、

「何度通っても」という補助的な解釈が加えられる根拠がどこに求められるべきであろうか。「猶」という言葉は、詞書の文脈に即せば、まず提示された「塩津山」という名を受けて「やはり」の意味であるはずである。「塩津山」の名のとおりやはり、の意味である。「塩津山」の名のとおり「猶からき道なりや」と「賤の男」が言った」と詞書は伝えている。いわば、「賤の男」が秀句をものしたのである。そのことを『紫式部集』は「賤のをのあやしきさまどもして」としているのである。詞書は、「賤の男」が「塩津山」の名のとおり、「猶からき」という言葉を発した、ということに関心を寄せているのである。あるいは、「賤の男」は「何度通っても、やはり、歩きづらい道だわい。」と思ったと読んで良いのかも知れない。ただ、そのことを『紫式部集』は「賤の男」が秀句を発したと理解した、ということであるかも知れない。

あるいは、先学の解のとおり、「賤の男」が相変わらずつらい道である、と言ったとしても構わない。それで、この言葉に対して「塩津山」という地名との関係に注目したということが重要である。いずれにしても、「賤の男」は歌わない。『紫式部集』はその言葉の意味や価値を「賤の男」たちは理解できない、知らないのだと解釈しているのである。「賤の男」の言葉の遊戯に触発されて、言語營為として歌を喚起させられたと『紫式部集』は記しているのである。

つまり、辛い道である、と言葉を発したとき、たまたまそこが塩津山であった、ということに気が付いた、というのである。思いがけない言葉の取り合わせの面白さを詞書は示している。歌が言葉の取り合わせの面白さを読み解くのではない。詞書ですでに興味のありかを言い尽くしているのである。そして、縁語、掛詞などを生み出すネットワークによって歌が生成されるに至る、言葉の連鎖と増殖性に興味は向けられている。

「塩津山といふ道のいとしげきを」の語句のない伝本もある。『紫式部集の研究 校異篇・伝本研究篇』によると、松平文庫本など定家本系統の多くの伝本や別本系本文では、「しほつ山といふ道のいとしげきを」に相当する語句がない。これらの伝本には、他に表記上の異同を除けば意味上問題となるような、歌における異同はみとめられない。これらによると「賤の男」の言った言葉の理由が、歌によって初めて種明かしされるといことになる。「塩津山」と「なをからき」の関係はより深いといいうる。異同は、伝本それぞれの、歌に対する解釈の差異を示すものである。どちらが、あるいはどれが古態か、原形に近いかということでは議論できない。残されてある伝本における統一性・完結性において、詞書は、歌がどのような解釈によって読まれるべきであるかを示している。詞書は歌をどのように読んでほしいのかということ、それぞれの伝本

において示していると考えることができる。

「賤の男」の発した言葉に対する『紫式部集』の理解を考えると、『土佐日記』の次の条は参考になる。

かくうたふをき、つ、こぎくるに、くろとりといふとり、いはのうへにあつまりをり。そのいはのものに、なみしろくうちよす。かちとりのいふやう、「くろとりのものに、しろきなみをよす。」とぞいふ。このことば、なにとはなけれども、ものいふやうにぞきこえたる。ひとのほどにあはねば、とがむるなり。

（鈴木知太郎氏校注『日本古典文学大系 土佐日記』岩波書店、四三頁、一九五七年）

有名な箇所である。楳取りが発した言葉に『土佐日記』はいたく興味を示している。「このことは、なにとはなけれども、ものいふやうにぞきこえたる。ひとのほどにあれねば、とがむるなり」において、楳取りの言葉に『土佐日記』の注目した理由は示されている。楳取りが「ものいふ」ことは「ひとのほどにあは」ないゆえに咎められている。「黒き鳥のもとに白き波を寄す」という言葉は、「風流めいた秀句」（『日本古典文学大系 土佐日記』四三頁頭注）、「秀句」（村瀬敏夫氏訳注『土佐日記』五〇頁、旺文社文庫、一九八一年）と捉えられてきた。紀貫之だからということとともに、『土佐日記』の方法からして、景物における色彩の対照的な手法においては、「なにか詩句でもいうように」（品川和子氏全訳注『土佐日記』

一五五頁、講談社学術文庫、一九八三年）という訳は修辭に触れる読みとして重要である。

この問題を『紫式部集』歌・詞書23に戻して言えば、徒歩で行く「賤の男」たちに対して、「世に経る道は」と世間慣れたかのような口ききをするところに、階級的な優越感や若さゆえの勝ち気を見ることが許されよう。貴族の姫君としての意識が滲んでくるとしても、それはありうることである。しかし、見落としてはならないことは、「人の程」であることにおいてこそ「ものいふ」ことが許されるという考えかたである。地名も、言葉への興味も、より階級的な問題であるのかもしれない。そして、『土佐日記』は歌を歌うまではない。『土佐日記』を参看するならば、『紫式部集』歌23において、「賤の男」が「塩津山」という名を受けて「やはり」の意味で、「猶からき道なりや」ということこそあたかも「ものいふ」ことのように感じられたことに対して、歌は呼び起こされたということができる。

この場合、伝本間に、歌に対する解釈的な異同が詞書と歌との関係に存在するが、にもかかわらず、地名からんで言葉の結合の面白さに『紫式部集』は関心を寄せている。このことは、歌の歌われた時の行路・帰路の区別の議論とは別の問題である。地名という言葉に反応するところに、『紫式部集』の文学的営為をみてとること

はできるだろう。

### (三) 歌を喚起する地名―「老津島」の歌

24 水うみにおいつしまといふすさきにむかひてわらはへのうらといふ  
うみのおかしきをくちすさみに  
おいつしましまるかみやいさむらん波もさはかぬわらはへのうら

これには、歌われた時期が行路・帰路のいずれかという区別とともに、記された地名に現在該当する地がどこかという議論がある。南波先生は「おいつ島」・「わらはへの浦」については、諸説があつて紛糾している（『紫式部集全評釈』一四三頁）とされ、さまざまに検討を加えられた後「最も該当性のあるのが『奥津島』であり『乙女浜』であろう」（同、一四六頁）と結論付けられている。ところで、問題をその先に伸ばしていくことは許されるだろうか。この歌の中に「おいつ島」と「わらはへの浦」という、地名における「古い」「童べ」という老・若の対偶がみられるのは偶然であろうか。一首の歌の中に地名の二つあることがすでに歌の例として希少である。『古今和歌集』から任意に、一首の歌の中に地名が複数ある例を取り出せば、

408 題知らず

都出でて今日みかの原泉川風寒し衣かせ山

よみ人知らず

音羽山音に聞きつつ逢坂の関のこなたに年を經るかな

(小町谷照彦氏「現代語訳対照 古今和歌集」旺文社文庫、一九八二年)

などが挙げられよう。前者は「みかの原(瓶の原)」「泉川」「かせ山(鹿背山)」という三つの地名がある。「今日見」「瓶の原」と音による結合があり、「みかの原出づ」「泉川」と再び音による結合がある。さらに「衣貸せ」と「鹿背山」とが音によるという結合がある。

地名が修辭として働くことに歌の全体が成り立つ。地名といつつつ、述語的に機能している後者には「音羽山」「逢坂の関」の二つの地名がある。「音羽山」は「音」に結合し、「音にききつつ逢ふ」「逢坂の関」と結合している。いずれも修辭的機能をもつところに地名の特質がある。

『紫式部集』歌・詞書23において、「老い」と「童べ」との対比は明らかであると考えられる。問題は、老・若の語の対偶をもって何が表現されているのか、ということである。「老いつ鳥島守る神」が諫めるからであろうか「童べの浦」は波立つことがない、という歌の表現はいかにも理屈である。「童べの浦」の波立つことのない理由を「老いつ鳥島守る神」が諫めるからだと廻行させている。そこには、「老い」によって「童べ」を押さえる、老による若への優

位という関係が隠されている。「老いつ鳥」「童べの浦」という地名の取り合わせはいかにも偶然のことであろう。ただその取り合わせに興味を惹かれたと詞書は指摘している。歌に歌う前に、詞書が説明を施しているのである。『紫式部集』は詞書に比重のある歌集であるということが出来る。なお、「神やいますらむ」という異同が存在する(南波浩先生『紫式部集の研究 校異篇・伝本研究篇』)によれば、松平文庫本など尊円本系統の諸本)。この場合も、「童べの浦」の波立たない理由が認められることにかわりない。

たしかに、眺望として「入海のをかしきを」と、ひとたびは注目してはいる。そのことを現実の体験を踏まえたこととして了解することに無理はない。換言すれば、詞書は入海の光景を実際に見たと言っている、その上で特に地名に注目していると言っていると考えるべきである。「波もさはがぬ童べの浦」と、いわば騒ぐことを本性とする「童べ」、その「童べ」という名を持ちながら、「童べの浦」が騒ぐことのないのはなぜか、というなぞを「老いつ鳥島守る神」との関係で解こうとしている。『紫式部集』は言葉の対照と矛盾に注目している。この歌が呼び起こされる契機は、「老い」と「童べ」という語の対偶を地名のうちに読み取り、興味をさし向けたことにある。関心はすばらしい景色にだけ向けられているのではない。詞書で「おいつしま」と「わらはへのうら」と共に並べて記

すのは、ゆえなしとしないのである。私家集の編集の意図や目的は、旅の途中の人生史上の心情に対する追憶にのみあるのではないだろう。歌は地名における言葉の面白さによって喚起されているのである。

#### (四) 名に対する親近―「見し人の」の歌

48 世のはかなき事をなけく比みちのくに名ある所くかいたるを見  
てしほかま

見し人のけふりになりし夕よりなそむつましきしほかまのうら

深く死の影を潜めている『紫式部集』において、「嘆く」という直接的な表現が特異であることに注目することができる。⑤ 同じ『紫式部集』の中で他に、「嘆く」という語がみられるのは、

ちる花をなけきし人は木のものさひしきことやかねてしりけん(歌  
43)

身をおもはずなりなけくことやうくのなめにひたふるのさまなるを  
おもひける(詞書55)

の例くらいである。歌43は宣孝と思しき人が散る花を嘆いたことをいうので、歌48と比較することはできない。「数ならぬ」「心だに」という歌55・56の抽象度の高い表現に組み込まれている語としての「嘆く」が、歌48にもみられることは興味深い。詞書48も宣孝の死

『紫式部集』の地名

を嘆くという次元であるよりも、近親の死を契機に、より超越的なものに至る苦悩をいうとみるべきであろうか。にもかかわらず、「世のはかなき事を嘆くころ」の歌が他界した者への悲しみの溢れ出るような慟哭として表現されないのはなぜか。「嘆く」と「なぞむつましき」とはどのように結び付くのか。「むつましき」とはどう理解すればよいのだろうか。

歌48に関連して、『源氏物語』に類歌のあることが知られている。一つは、

空の、うち曇りて、風ひや、かなるに、いと、いたく、うちながめ給ひ  
て、

見し人のけぶりを雲と眺むれば夕の空もむつましきかな

と、ひとりごち給へど、えさしいらへも聞えず、「かやうにて、おはせ  
まししかば」と、思ふにも、胸ふたがりておほゆ。

(夕顔巻、『日本古典文学大系 源氏物語』一巻一六八頁、岩波書店、  
一九五八年)

もう一つ、

八月廿余日の有明なれば、空の気色も、あはれすくなからぬに、大臣の、  
鬚に暮れ惑ひ給へるさまを、み給も、ことわりにいみじければ、空のみ  
ながめられ給ひて、

のばりぬる煙はそれとわかかねどもなべて雲井のあはれなるかな

(葵巻、回三四〇頁)

葵巻の例では、「あはれなるかな」という表現に、光源氏の、女の

死に対する悲哀感を読み取ることが可能である。煙が雲井に至り、混じり合った状態になることのうちに、他界した者のよすがをさがそうとする思いがある。煙が雲井の広がりの中に溶け込んでいくさまに思いを寄せるところに奇妙な安堵すら帯びていると感じられる。

夕顔巻の例は、夕顔を火葬にした光源氏が、煙の行方を見つつ、「夕の空もむつまじきかな」という条である。悲哀感よりは、他界した者の至った「夕の空」に対する親近感が強く感じられる。『紫式部集』に同様に、「むつまじきかな」というのはなぜか。これを、古代雲魂観念の介在をいうだけでは十分でない。木船重昭氏は「塩釜の浦の縁語の陸奥が掛けてある」とする岡説（『源氏物語の基礎的研究』八一頁）を支持しておられる（『紫式部集の解釈と論考』

八九頁、笠間書院、一九八一年。以下略称する）。そして、木船氏は「夕の空もむつまじきかな」という「その感覚は奇異である」という。この歌について、「この上なく抑制された表現」（清水好子氏、九〇頁）であるという指摘があり、一方では、「理知を超えた、しほらしい心情の表明であり、実感のこもる素直な哀傷歌」（南波先生、二八七頁）だと評価されている。だが、抑制か率直かを問うことにこだわることで、表現の担うことはいささかずれている。『紫式部集』の関心の向かうところが異なる、といわなければならぬ。

『源氏物語』の例においては、死者が火葬されて煙となり空に昇

って行ったのち、「雲」「空」「雲井」に対して光源氏は「むつまじきかな」「あはれなるかな」と直接感じている。『源氏物語』と『紫式部集』とが同じ「作者」によるからといって、語彙が同一であれば意味用法も同一である、ということにはならないこともいうまでもない。ところで、これらの『源氏物語』の例と、『紫式部集』との決定的な相違は、後者が「名ぞむつまじき」と、「名ぞ」とあえていうところである。「夫が葬られて煙と化した夕べからこちら、塩釜の浦という名さえ懐かしく思われる」（清水氏、九〇頁）とさりげなく解釈するのは「名ぞ」が生きてこない。なぜ「名」がむつまじいのか。情愛を感じた者の他界において、その名残りやよすがとして可視的な媒体に心動かされることは心情として理解できることであろう。それにしても、『紫式部集』では、「名ぞむつまじき」なのである。これほど明確に関心が地名という名に向けられていることは重大である。木船氏は、「塩釜の浦」は「うらさびしく」「悲し」き歌枕として定着していた」として「夫を茶毘に付した煙の絶えてはかない思い出から、あの貫之の有名哀傷歌の連想を契機に、歌枕〈塩釜の浦〉の〈名〉はすなわち「うらさびし」「悲し」「恨み」にほかならず」「その〈名〉を〈むつまじき〉と、式部は詠るのである」（木船氏、九〇頁）と考えられたことが解釈として妥当であろう。

「名も」という異本（『紫式部集の研究 校異篇・伝本研究篇』によれば、松平文庫本など藤田本系統、および谷森家旧蔵本など定家本系統諸本）では、関心のありかが「名」に向かっているということが、比較して相対的には弱められる。だとしても、亡き人に対するむつまじきとともに、「名も」となせ「名」が持ち出されてくるのか、やはり同様の問題は残る。また、詞書の末尾「しほかま」には「しほかまの浦」という異同もある（群書類従本など）。これも、詞書のありかたとして、わざわざ歌枕を付加的に示しているのであり、「名」に関心を寄せずにはおけないことを明らかに表している。もうひとつ、歌の異同として注意しなければならぬことがある。

「見し人のけふりになりし夕よりなそむつまじきしほかまのうら」には、松平文庫本のみだが、「むつかしき」という異同がある。ところで、『源氏物語』の歌にも同様の異同がある。池田龜鑑氏『源氏物語大成』（一卷三〇五頁、中央公論社、一九五三年）によると、葵巻の歌「のほりぬる」の異同（底本 大島本）は、「けふりは―けふりを 七毫源氏・尾州家本・大島本〔河〕、けふりは―けふりを 陽明文庫本〔別〕」というものである。一方、夕顔の巻の歌「見し人の」の異同（同、一四二頁、底本 大島本）は、

むつまじきかな―むつまじきかなと（朱）大島本〔青〕  
むつまじきかなと 三条西家本〔青〕

というものである。また、『岷江人楚』掲載の本文にも「むつかしき」という異同に触れている。

弄そらのうちくもりたるけしきよりよめるにや九月廿日あまりのそらのけしきなど思ふへし 秘時雨かちなる空なるへし烟を雲とは変化して跡もなくみなせはなり箋同 此外の義弄に同じ 聞書花にはむつかしき哉とあり道達院かくのごとくよまる夕の空も物むつかしく心にかゝりおもひをもよほすなりしなえうらふれなといふやうの心歎称名はむつまじきにてよく聞えたりと云云然れとも後にはむつかしきか面白きよし申さると云々 私云新「見し人のけむりとなりし夕より名もむつかしきしほかまの浦とあり 此歌紫式部の詠なり夕の空の雲はさなからなき人のけふりの行へにやとなかむれは物うかるへき夕の空さへなつかしきといへる 義にや

〔日本文学古註釈大成 源氏物語古註釈大成 岷江人楚〕複製版上巻二六六―二六七頁、日本図書センター、一九七八年

「聞書花にはむつかしきとあり」とあるが、『花鳥余情』にはこの点に触れたものがない（『日本文学古註釈大成 源氏物語古註釈大成 花鳥余情』複製版、日本図書センター、一九七八年。同『源氏物語古註釈大成 花鳥余情』複製版、日本図書センター、一九七八年。伊井春樹氏編『源氏物語古注集成 松永本花鳥余情』、桜楓社、一九七八年）。なお、『湖月抄』は異文として「むつかしき」を傍書している。

みし人のけふりを

(略)「私」夕の空の雲は、さながらなき人の、煙の行衛にやとながむれば、ものうかるべき夕の空さへ、なつかしきといへる義にや。或本にむつかしき哉とあり、夕の空もむつかしく心にかかりて思を催す也。是道逢院との御説なり。(三玉)二の句、けふりと雲をといはでは、事たがへるやうなれど、然らず。けふりを、あの雲ぞと思ひてながむれば也。結局、むつかしき哉とある本は誤也。(略)

(三谷栄一氏増訂「増註 源氏物語湖月抄」上巻、名著普及会、二二五頁、一九七九年)

『岷江入楚』は「むつかしき」について「夕の空も物むつかしく心にか、りおもひをもよほすなりしなえうられふれなというやうの心歎」とある。また『湖月抄』には「夕の空もむつかしく心にかかりて思を催す也」とあるが、「むつかしき」は気分の問題だけであろうか。むしろ「むつかしき」は、夕顔の他界を光源氏がけがれと認めることによる表現であり、光源氏がけがれと認めたと解釈する本文の表現であるということが出来る。『湖月抄』の「結局、むつかしき哉とある本は誤也」とする考えは異同に対する考え方として行き過ぎた判断を示すものと感じられる。

このように検討して来るならば、『紫式部集』に地名がからんでくるとき、「塩津山」「童べの浦」以下いづれも、言葉としての地名に喚起されて歌は詠まれてくることが指摘できよう。

(五) 即境性としての地名——「難波潟」、「三尾の海に」の歌

17 つのくにといふ所よりをこせたりける

難波かたむれたる鳥のもろともにたちる物と思はましかは

かへし

(歌欠)

この歌は「紫式部」の歌でなく、他人の歌であるとされている(岡氏、一八五頁)。これについて次のような見解がある。「水鳥が干潟に群れる光景は早速目にした」(清水氏、三三頁)とされている。また、「西の海へ旅立つて行く友が」「途中、難波の浦の辺りで、鳥どもが仲よく群れ遊んでいるさまを見て」(南波浩先生『紫式部集全評釈』一〇四頁)、と解釈されている。「目にした」とされ「さまを見て」ということは現代語訳の上で見過ごされてよいほどのことであるのかも知れない。ただ、必ずしも、実景を見て直接に詠歌に及んだことをのみいふ必要はない。訳するとき、あるいは詠歌の状況を説明するときに、実景を見たことを事実とみとめるとしても、ひとたび言葉として捉えられ歌われるとき、「難波潟」「群れたる鳥」は、「津の国」という語から喚起されてくる。歌の主旨はあくまで下句にある。あなたと一緒にいると思いたいという気持ち、そ

れをどのように表現するかは歌の修辞にかかっている。その意味で、「難波潟」「群れたる鳥」は即境的景物としてとらえることができる。

20 あふみの海にてみおかさきといふ所にあみひくを見て

みおの海にあみひくたみのてまもなくちるにつけて宮こ恋しも<sup>⑧</sup>

これも同様である。一首の歌の主旨は「立ち居につけて都恋しも」である。それを導いてくるのが、「みのお海にあみひくたみのてまもなく」であり、「たちる」という語で網引く者の立ち居と詠者の立ち居とが重ね合わされる。詞書によれば、「三尾の海」で働く人の様子に触発されて歌ったという。そのことを「みおの海にあみひくたみのてまもなくちるにつけて」と歌うとき、即境的景物として組み立てられる上句は、心情を導く修辞として機能する言葉になる。

『紫式部の研究 校異篇・伝本研究篇』によると、「ひまもなく」

(群書類従本)、「手もたゆく」(紅梅文庫本や別本系)という異同がある。校定本文(南波浩先生校註『紫式部集』二〇頁、岩波書店、

一九七三年)では「手間もなく」を採っておられる。そしてこの

「手間もなく」の用例は他に見当たらない(南波浩先生『紫式部集全評訳』一一八頁)ことから「ひまもなく」が「わかりやすい」

(同)と判断して異同における優劣を示されつつ、「紫式部集全評訳」(一一六頁、一九八三年)では「ひまもなく」を採っておられ

る。木船氏ははっきり「(ひまもなく)の本文を採るべき」(四三頁)といわれる。この歌の核心は「都恋しも」の一節に尽きている。目的地への思いがみられない。と同時に都を離れて目にする光景は、この歌の場合不安感であるよりは、「をかしきに」と好奇の対象としての興味である(詞書24)。「ほとんど外出の機会のない中流貴族の娘にとって、はじめて見るもの」(清水氏『紫式部』四三頁)を詠歌の動機として、現実の経験によってのみ詞書と歌を説明するのは歌の表現それ自体が閑却されてしまうことになる。

#### (六) 歌における地名の有無

1 はやうよりわらはともたちなりし人にとしころへて行あひたるかほのかにて十月の十日の程に月にきおひてかへりにければ<sup>⑨</sup>

めくりあひて見しやそれともわかぬまに雲かくれにしよはの月かな<sup>⑩</sup>

2 その人とをき所へいくなりけり秋のはつる日きてあるあか月にむし  
の声あはれなり

なきよはるまかきの虫もとめかたき秋の別やかなしかららん

6 つくしへ行人のむすめの

にしの海をおもひやりつ、月みれはた、にながる、比にも有哉

7 返ことに

にしの行月のたよりに玉章のかきたえめやはくものかよひ路

『紫式部集』の冒頭には、下向していく女友達に代表される別離

の歌が比較的集中している。前者の二首は、有名な冒頭の歌である。歌6・7の「筑紫」へ行く女友達と、同一の人物とみるべきなのかどうか、また歌われたことが同一の出来事についてかどうかは、不明であるとしかしいようがない。というよりも、その問い自体が成り立つかどうかについて「紫式部集」自身は関与しないのではなからうか。いわば、前者二首と後者二首とは、表現の次元が異なる。

地名の要請される歌と、地名を必要としない歌とがあるということをもとめる必要がある。「筑紫」は律令に制定された国・郡名では必ずしもないが、明らかに特定された地名であり、「西の海」という語と連鎖していると考えられる。これに対して、「遠き所」とは父や夫の任国の国・郡名を臚化した表現であるとは必ずしも言い切れない。「遠き所へ」とは語において「雲隠れ」という語と響き合っている。臚化というよりは語の質の問題である。「雲隠れ」には他界が象徴されているはずである。別離は同時に死別を意味していたという思いが冒頭の歌には込められている。すでに木村正中氏が冒頭歌について、「月が雲に隠れたことに友人との離別が比喩されているだけでなく、その「雲隠る」には「死」が暗示されているのではないか」（『紫式部集』冒頭歌の意義」、南波浩先生編『王朝物語とその周辺』、三五三頁、笠間書院、一九八二年）として、他の用例からとくに「月」との関係に注目されて、「極限的な別離とし

ての「死」（同）を読み取ろうとされている。まさしくそのとおりであると考えられる。

詞書2について「遠き所へ行く人」を思うとき、「虫の声あはれなり」である。詞書に導かれて歌を読むとき、その虫は、「秋果つる日」の「鳴き弱る」虫である。虫と人とが重ね合わされる。命の終焉を予感させる虫の音とともに離別した人に、やがて他界の予感が感じたことを、1・2の歌の配列の中で表現としているといつてよい。

### （七）言葉としての地名

いったい、私家集は文学研究の対象たりうるのだろうか。それぞれの伝本の編集の意図に従って読むことがまず求められるであろう。そのとき、言葉は、歴史的事実なるものに還元しては見えなくなる。たしかに、伝記資料の少ない女性歌人を調べるのに、私家集が注目されることも故なしとしない。とはいえ、詞書はそのまま事実ということにはならない。それでは、私家集は資料化されてしまうことになる。『紫式部集』は詞書と歌という、言葉によって捉えられたものに他ならない。詞書は歌に対する解釈であり、歌の意味を確定しようとする言葉の動きをもつ。

地名は言葉を挑発する。『紫式部集』の詞書には、言葉遊びとし

て地名に対する関心が見られる、ということがいえよう。さらにいえば、地名は歌を喚起する。その際、『紫式部集』にあつては、歌はそれ自体として独立して読むに堪えないほどである。歌は詞書に對して付屬的であるとさえいえる位置にある。地名は、事実の記録としてではなく、修辭の表現の問題に關係していると考えるべきである。地名は私家集に對する重要な鍵語であるということをも認めなければならぬであらう。とりわけ『紫式部集』では、多くの歌の中から、結果的には題詠のような歌が排除されている、と推測される。例えば、面立たしい献上歌を卒直に光榮として列記するというでもない。そして何よりも、取り上げた歌・詞書の例の一端をも

つてわかるように、地名を手掛かりにすれば、言葉遊びとすらいいうるような、言葉の組み合わせに對する興味が感じられる。歌集と云いつつ、歌を残すというよりも詞書に、重い編集の意図がかかかつていよう。『紫式部集』は雑纂と見えて、言葉の取り合わせの面白さへの注目、言葉の組み合わせに對する関心、言葉の遊戯性に寄せる興味において貫かれているのではなからうか。『紫式部集』は私家集の中でもいささか特異なものであるのではないかと推測されるので、地名を手掛かりとする分析がどのくらいの有効性と一般性をもつのかはよくわからない。ただ端緒として、地名の問題は、私の関心云々の問題でなしに、私家集としての『紫式部集』それ自身

の関心がどこにあるかに依拠する問題であると考えられる。

最後に、『紫式部集』についてのさまざまな論考と業績について触れることができず、非礼があつたこととひたすら迷蒙をお詫びするばかりである。

#### 注

- ① 戦後における『紫式部集』の研究で、『紫式部集』自体に詳しく触れる代表的な研究として、まず岡一男氏「紫式部集」の本文の成立とその文藝的価値―歌人としての紫式部―『源氏物語の基礎的研究』（東京堂、一九五四年、増訂版一九六六年）が挙げられる。岡氏は、『紫式部集』『紫式部日記』『源氏物語』といふ三つの作品の根本現象たるイデオロギアを歴史的現実の形姿において再現することを究極の念願（同、「緒言」一頁）とされる。『紫式部集』を『紫式部日記』とともに『源氏物語』及びその作者の根本資料（同、三頁）として挙げておられる。今井源衛氏「紫式部」（吉川弘文館、一九六六年）、角田文衛氏「紫式部とその時代」（一九六六年）、角田氏「若紫抄」（至文堂、一九六八年）などは、『源氏物語』の研究や紫式部の伝記研究を目的とされている。今井氏は、岡氏のいわれた『紫式部集』の配列の原則について、「紫式部集の復元と恋愛歌」（『文学』一九六五年二月号）で文学の側から論じておられる。次に、竹内美千代氏「紫式部集評釈」（桜楓社、一九六九年）は、はやく個別の私家集研究としてまとめられたものである。その後、清水好子氏「紫式部」（岩波新書、岩波書店、一九七三年）は、『紫式部集』に即して紫式部の人生を特に若い時代について、精神的に描いたものとしてきわめて印象的である。それから、南波浩先生校注『紫式部集』（岩波文庫、岩波書店、一九七三年）、さらに近時山本達彦氏校注『新潮日本古典集成 紫式部日記紫式部集』（新潮社、一九八〇年）

が出て、活用されるに至っている。そして、河内山清彦氏「紫式部集紫式部日記の研究」一九八〇年、木船重昭氏「紫式部集の解釈と論考」(笠間書院、一九八一年)など関連の大著がある。木船氏は「個々の詠歌の表現を解析し、その内面世界の解明を志向するにとどまらず、本家集総体の文藝的享受の全きをも志向するものでなければならない」(序、一頁)とされる。解釈の詳細にわたる注釈書である。

南波浩先生の「紫式部集の研究 校異篇・伝本研究篇」(笠間書院一九七二年)は、長年の博搜によって校本の系統分類を試み、その全望を明らかにされた貴重な成果である。また、南波浩先生「紫式部集全評釈」(笠間書院、一九八三年)は従来の研究の成果を、初めて総合的にまとめ創見を加えられた大著である。なお、参考文献については、南波先生「紫式部集全評釈」巻末に詳しい資料がある。

② 本稿で触れなかった歌で、地名の関与する歌・詞書は次のとおりである。概要を見るために、南波浩先生校注『紫式部集』(岩波文庫)による。

詞書13	賀茂、片岡	歌13	片岡
詞書14	河原		
詞書16	西の海	歌16	かへる山
詞書18	筑紫、肥前	歌18	松浦、鏡
		歌19	松浦
詞書21	磯の浜		
詞書25	日野岳	歌25	日野、小塩
		歌26	小塩山
詞書29	近江守	歌27	かへる山
詞書47	嵯峨野	歌29	水うみ

詞書57 内裏わたり  
歌49 西の海  
歌57 九重  
歌60 み吉野

詞書73 内裏

詞書81 都、かへる山、呼坂  
歌81 たごの呼坂

詞書82 水うみ、伊吹の山  
歌82 越の白山、伊吹の岳

詞書98 かひ沼の池  
歌98 かひ沼の池

詞書98 かひ沼の池  
歌99 かひ沼の池

詞書104 内裏  
歌101 三笠山

詞書104 内裏  
歌102 三笠山

詞書106 内裏  
歌104 九重

詞書121 内裏  
歌102 三笠山

詞書126 加賀少納言  
歌122 百歌

但し、詞書21について、「磯の浜」には従来から議論がある。井上真理子氏は「紫式部集」の「磯の浜」という地名について、「場所を表しているものを代名詞以外」について「といふ」という語の語句の有無を検討し、「よく知られている地名か、普通名詞か」の場合は「といふ」語がつかないとして、「磯の浜」は「普通名詞『磯』の『浜』と考えるのが最も自然だろう」と結論されている(紫式部集の地名―磯の浜をめぐる詞書の文章)。「愛文」一六号、一九八〇年七月)。南波浩先生「紫式部集全評釈」には、この「磯の浜」をめぐる詳しい検討をされ、「磯」を地名とする主旨の見解がある(一一八頁)。

③ 最近の研究として目に触れ得たかぎりでは、久保田孝夫氏「紫式部越前への旅」(『同志社国文学』一八号、一九八一年三月)、井上真理子氏「紫式部集」の地名―磯の浜をめぐる詞書の文章」(『愛文』一六号、一

九八〇年七月) などがある。

④ 岡氏「源氏物語の基礎的研究」一七五頁、竹内氏「紫式部集評釈」七二頁、清水氏「紫式部」四七頁を参照。旅中の歌のそれぞれが往路か復路かの諸説については、南波先生「全評釈」で諸説を一覧することができる。錯簡説も絡んでいる(木船氏、二〇五頁)のが研究の現状である。

⑤ 「なぞむつまじき」の「なぞ」を、「何ぞ」、何ゆえとして捉え、なにゆえに「むつまじいのか」と、つまり疑問文として読めないかという可能性がないわけではない。これだと自己の内側に向かって問いかけをすることになる。ただ、それではわざわざ詞書に「塩釜」もしくは「塩釜の浦」と地名を強調していることと歌との関係がわからなくなる。普通、絵の前に歌を歌うとどのように、絵の中の人物に立ち入って歌を読むこともないので、詞書・歌48は「名」にこだわっていると見ることが無理のない解であると考えられる。他の主な異同は次のとおり。

かいたる・ を見て

塩がま・

絵(古、別) 見侍りてよめる(別) の浦(群他)

⑥ 例えば、歌42「夕霧にみ鳥かくれし鴛鴦の子の跡を見るくまどはる、かな」を「亡くなりし人のむすめ」の歌ととるか、「私」の歌ととるか、また「私」は近親の死に慟哭したかしくなかつたか、慟哭を表現したかしくなかつたかという点で、議論が分かれるところである。歌42の詞書は句読点をどう打って読んでいくか、文脈のたどりかたによつて詠歌主が誰になるか入れ替わってしまうので、極めて難解である。「鴛鴦の子」という表現から「まどはる、」ことは継娘のこととみるべきか。筆跡が鳥の(足)跡とされるのは、「源氏物語」において、薫が柏木の病床の遺筆を弁から託されたものを見る例をまず想起できよう。歌42は、継娘が他界した父の筆跡を見て歌つたものとみるのが妥当か、と考えられる。

【紫式部集】の地名

⑦ 類歌に次のようなもののあることが指摘されている(榎本正純氏「源氏物語・夕顔巻の創造―宣孝の死と河原院と京極御息所」、平安朝文学研究会編、岡一男先生喜寿記念論集「平安朝文学の諸問題」笠間書院、一九七七年)。

94 ま、は、のきたの方

みし人のくもとなりにしそらわけてふる雪さへもめつらしき哉

(「齋宮女御集」書陵部本、和歌史研究会編「私家集大成」第一巻、

四五〇頁、明治書院、一九七三年)

榎本氏は、「夕顔巻において、作者の体験したことが過去の史実とどうか、わりながら虚構化されているのか」(一四一頁)を検討する視点から、「紫式部集」の宣孝関連歌を考察されている。その際、この歌48について、「為頼朝臣集」所載の「磯に生ふるみるめにつけて塩釜の浦さびしくもおもほゆるかな」や「古今和歌集」貫之の有名な歌「君まさで」などとの関係に触れ、「人の死と関連して塩釜の浦のイメージが既にあった」と指摘されている。なお、「私家集大成」によると、「齋宮女御集」西本願寺本「三十六人集」(46)は「そらわけて」、正保版本歌仙歌集「空なれば」(38)、小島切は該当歌がナシ、という異同がある。

また、「和泉式部集」に、

274 はかなくて煙となりし人により雲居の雲のむつまじきかな

(清水文雄氏校訂「和泉式部集」五四頁、岩波書店、一九八三年)がある。「齋宮女御集」「和泉式部集」いずれも、他界の徴し付けとしての「雲」「空」「雪」「煙」などに直接的に親近感をもっている。ただ、前者は他界からこちらへの視線が感じられる点が注意される。

⑧ 都恋しも

き(紅・別)

という異同が注意される。

⑨ 早く岡氏が「七月十日」の誤写を指摘されている（二七四頁）。木船氏も誤写説を支持（五頁）されている。ところで、田中新一氏は現行のままでも読解可能であると主張されている（『紫式部集』冒頭部の年時について）『愛知教育大学研究報告 人文科学編』二九号、一九八〇年）。田中氏の考察の目的は、歌1・2の詠歌年時の確定に関心があると拝察する。ただ、一般論的に考え方の方向として、一見矛盾とみえる暦日を誤写で処理せず、現存伝本に対する解釈の問題として検討されようとする姿勢に対して敬意を表したいと思う。私は、現行の配列では次のように読むことが編集の意図に添うと考える。助動詞「なりけり」の働きによつて、2は1に対する説明的立場を取り、時間的には1に対して先立つ歌として読まれるように配置されていると考えるべきである。1・2は時間的に連続させることはない。ただ、この配列については、1・2の間の空白の有無と関係する。

⑩ 南波浩先生『紫式部集の研究 校異篇・伝本研究篇』によると、実践女子大学本と瑞光寺本は歌1・2の間に一行空白がある。欠歌の注記の有無はさまざまな伝本の歴史的な過程を示すものと了解できる。特に欠歌を注記しない伝本はそれで完結性を有すると考える態度を伝本自体がもつと考えるべきであろう。

⑪ 岡一男氏、角田氏、竹内氏それぞれに「筑紫へゆく人」が誰かを歴史上の人物として推測されている。

⑫ 私家集には四季の部立による配列のものが圧倒的に多い。私家集といえども、勅撰集を規範としていることが明らかである。（拙稿「紫式部の表現―宣孝の死を契機に」『同志社国文学』九号、一九七四年二月、同「平安中期女流私家集の共通項」同二五号、一九八〇年一月）。それに対して、『紫式部集』に貫かれていることは、一般に藤原宣孝と言われている男とのやりとりと響き合うところがある。例えば、歌・詞書28

での誘いと牽制の言葉、歌・詞書29のしらじらしい言い訳の言葉、この男はいかにも饒舌である。印象に残るような、気の利いたことをいつてやろうという、余裕すら感じられる挑発の言葉、都合の悪い事実を覆い隠すほどの過剰の言葉。さらに、歌・詞書31「文のうえに朱といふ物をつぶくんとそ、きて涙の色をとかき」てよこす、男の遊び心と、それ以後の言葉の応酬には、『紫式部集』における、地名という言葉に関する遊戯性につながるころがある、ということが出来る。

なお、配列の原理については、久保木寿子氏「紫式部集の増補について（上）（下）」（『国文学研究』六一・六二集、一九七七年）が、日記歌との関係で詳細に論じられ、「詞書表現」の「異質」さから「本来の紫式部集」と「増補部分」との関係に触れておられるが、今回はこの問題について触れることができなかった。